

## オペラ「滝の白糸」あらすじ

**第一幕** 真夏の昼下がり。金沢・浅野川の河原に立ち並ぶ芝居小屋の中で、当代随一の人気を誇る女水芸人・滝の白糸(水島友)は物思いに耽っていた。

あれは高岡と石動を結ぶ乗合馬車での出来事。一向に進まない車内で、乗客たちは馬車よりも人力車の方が速いのではないかとヤジを飛ばしていた。すると、馬丁は一頭を解き放って白糸を抱え、乗客を車内に残したまま走り去った――。

楽屋の鏡台の前で馬丁に思いを馳せる白糸。出番を知らせに顔を出した口上は連日の満員を喜ぶが、客を水芸に取られっぱなしの南京出刃打ちはその様子を面白くなさそうに眺めていた……。

ある日、月光が降り注ぐ浅野川へ夜涼みに出ていた白糸は、あの馬丁に出くわす。自らを村越欣弥と名乗った馬丁は、あの一件で職を解かれて、働き口を求めて金沢まで来たことを告白。さらに、母を養うために学問を途中で諦めて馬方となったことも打ち明ける。

その話を聞いた白糸は仕送りを申し出る。「酔狂だ」と言う欣弥だったが、白糸の真剣な眼差しを見てその申し出を受けることにした。白糸は喜び、高岡に残る欣弥の母の世話も引き受けた。欣弥に何か望みはあるかと尋ねられた白糸は、羞恥心を振り切るように想いを告げ、欣弥もそれを受け入れる。浅野川での玉響の星の逢瀬であった。

**第二幕** それから2年。白糸と欣弥は遠く離れながらも互いを想い、欣弥の母は名前も知らぬ仕送りの主に会う日を信じて待っていた。

晩春、南京出刃打ちは白糸に福井での興行の話を持ちかける。仕送りの金の工面に行き詰まっていた白糸は、これが彼の策略とは露知らず喜ぶ。

興行が終わって河原を歩いていると、白糸は突如現れた出刃打ちの一団に懐の金を奪われてしまう。手には抗った時に千切った浴衣の片袖と一団が落とした出刃包丁が残った。

白糸が放心状態で歩いていると、やがて夜涼みをする老夫婦に出会う。白糸の形相に2人が驚いて悲鳴を上げた瞬間、狂気が宿り、気が付くと2人は血まみれで倒れていた。白糸は握っていた出刃包丁と片袖を落とし、茫然とするしかなかった。

**第三幕** 石動へ向かう乗合馬車の中は殺人事件の話で持ち切りだ。車内にはいまや検事代理となった欣弥とその母も乗っていた。乗客たちの噂では南京出刃打ちが疑われているが、本人は「白糸の金を奪いはしたが、老夫婦は殺めていない」と言い張っているという。ところが当の白糸は「金など奪われていない」と主張しているとか。

金沢地方裁判所。出刃打ちと白糸、また検事代理の欣弥らが入廷する。白糸は衝撃と羞恥で目を伏せ、欣弥は変わり果てた白糸の姿に胸が張り裂けそうになる。当初は「盗みに遭った覚えはない」と繰り返す白糸だったが、自状することで欣弥が手柄を立て出世するならばと覚悟を決め、真実を語り出す。それは同時に3年分の欣弥への思いでもあった。その潔さを傍聴人たちが褒め称える中、全てを悟った欣弥の母は感謝と謝罪を切々と述べる。泣き崩れる白糸。裁判長は死刑を宣告する。

処刑前夜、月光のさす監獄を訪れた欣弥は、恩人である白糸に極刑を下した許しを請う。立派になって姿を現した欣弥に、白糸は「もう十分に恩は返した」と再会を喜ぶ。「あなたなしには生きられぬ」と言葉を重ねる2人。白糸に別れを告げてしばらく後、欣弥の自室に銃声が轟いた。